

農作物技術情報 第4号 花き

発行日 平成29年 6月 29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ りんどう 葉枯病、ハダニ類、リンドウホソハマキ等の病虫害防除を徹底しましょう。
- ◆ 小ぎく 白さび病、アザミウマ類、アブラムシ類等の病虫害防除を徹底しましょう。収穫前に次年度用の健全な親株を選抜しましょう。
- ◆ 共通 圃場乾燥が続く場合は早めに灌水しましょう。圃場の排水対策を実施し、湿害に注意しましょう。

りんどう

1 生育概況

露地りんどうの生育は、地域間差はありますがほぼ平年並に推移しており順調に生育しています。りんどうの定植は、6月上旬から本格的に始まり現在は終了しています。病虫害も平年に比べ少なめに推移していますが、一部で葉枯病が見られます。いまのところハダニ類の発生もあまり見られませんが、今後の天候次第では増加していく可能性がありますので注意が必要です。リンドウホソハマキの被害も散見されはじめていますので、継続して防除が必要です。

2 圃場管理

(1) 株養成

定植後の乾燥は、苗の生育に大きく影響します。晴天が続く場合は必ず灌水し、圃場の状態によってはうね間灌水を実施します。また、定植1年目に葉枯病やリンドウホソハマキが発生すると翌年の株落ちの原因となります。採花圃場と同様に病虫害防除を徹底します。

(2) ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるように、こまめに上げて茎の曲がりの発生を防ぎます。また、ネットに葉が絡んで曲がることも多いので、随時圃場を見回り、修正してください。

(3) 灌水・排水対策

大雨が予想される場合、水路などからの水の流入を防止するとともに、排水路の点検を行うなど排水対策を講じてください。また、反対に雨が少なく乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等に灌水します。

(4) 収穫・調製・出荷

ア 収穫

収穫は頂部の蕾が膨らみ色づいた頃が標準ですが、出荷先や輸送形態により早めの収穫とする場合もありますので、事前に確認し適切な切り前とします。

収穫は日中の高温となる時間帯を避け、涼しい朝夕に行います。やむを得ず、日中採花する場合は、収穫後直射日光に当たらないようにし、速やかに日陰に運び水揚げを行います。

株の消耗を防ぐため、3本程度の茎を残し、残った茎は残花部を折り取ります。また、残花

の折り取りはアザミウマ類やアブラムシ類の被害軽減にも効果的です。

イ 乾燥

雨天時に収穫した場合や朝露がついている場合は、扇風機や切り花乾燥機を用いて必ず乾燥させます。濡れたまま結束したり箱詰めしたりすると、輸送中の蒸れなどによる品質低下の原因となります。

水を切るため逆さにして振ることは、茎が折れることに加え、花の蜜が花卉や葉などに付着して品質低下の原因となる場合がありますので避けます。

ウ 選別

花段数、長さ、太さ、曲がりなどを基準に選別します。出荷規格を遵守し、信頼を落とさないようにします。病虫害の被害があるものは出荷しないことを基本とします。

また、暗い作業場での選別作業は、病虫害痕の見落としなど品質の低下や、作業者の眼の疲労を招き作業性の低下を引き起こします。りんどうの選別は収穫時の花段数の確認等で目を酷使していますので、作業場全体と選別を行う作業台の明るさを十分確保します。

エ 調製・水揚げ

選別調製後、規格別に 10 本束にして水揚げを行います。

束ねた 10 本の切り前や品質が揃うよう留意します。水揚げが長時間になると輸送中に蒸れることがあるので、極端に長い時間（24 時間以上）の水揚げは控えます。

オ 箱詰め

各部会等で決められた方法で箱詰めを行います。輸送中に花束が動いて傷むことがないように確実に固定します。

(5) 病虫害防除

ア 葉枯病

降雨により急激に増加し、中上位葉まで発生することがあります。定期的に薬剤散布し発生を予防します。薬剤散布は降雨前に行うことが理想ですので、気象予報を確認しながら効果的な防除を行います。

イ 褐斑病（写真 1）

7 月下旬まで重点的な防除を継続します。発生してからは薬剤の効果が高いので予防散布に努めます。

株仕立てを行って株元の通風を良くし、薬液が畦の内側にまで届くように薬剤散布することがポイントです。



写真1 褐斑病

ウ ハダニ類

高温・乾燥により発生が多くなりますので、発生密度が高くなる前に薬剤散布を行ってください。薬剤散布は散布量を十分にして、葉の裏側を洗うように散布すると散布ムラも無くなり効果が高まります。

なお、ダニ剤の使用においては同系薬剤の 1 年 1 回使用を基本とし、抵抗性の発現を避けてください。

エ アザミウマ類

蕾がふくらみ着色が始まる頃から蕾に侵入し、花卉を吸汁します。蕾の中に入ると薬剤がかからず、大量に増殖して被害が大きくなりますので、侵入前の予防に努めます。

アザミウマ類は雑草を含むあらゆる植物に寄生するので、周辺の作物の防除、雑草の処理を必ず行ってください。

さらに、残花茎でのアザミウマ類の増殖を抑えるために、収穫が終わった圃場の残花茎は全て折り取り処分します。

オ リンドウホソハマキ（写真2、3）

6月上旬以降、頂部の食害や茎への食入が増加してきます。茎内に侵入した幼虫については防除が難しいので、圃場をよく観察して被害茎を折り取り処分するなど防除を徹底してください。



写真2
ホソハマキの頂部食害



写真3
ホソハマキの茎への潜入痕

小ぎく

1 生育概況

8月咲き品種は、側枝長が50cm前後となり整枝作業も終了しています。生育は概ね順調です。また、9月咲き品種は5月下旬から6月上旬に定植され、こちらも概ね順調な生育となっています。

病害虫は、特に問題とはなっていませんが、白さび病やナモグリバエ等の発生も見られていますので、継続的な防除が必要です。

2 圃場管理

(1) 灌水

圃場が乾燥すると側枝の伸長不良や開花遅れの原因となりますので、極度に乾燥する前に灌水します。一方でりんどうと同様に長雨や集中豪雨に備えて排水対策を講じます。

(2) 整枝

側枝が20～30cmに達した頃に株あたり生育の揃った側枝が3本程度残るように整理します。

(3) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から20cm程度の葉を掻き落とし通風をよくすることで、病害発生の抑制、収穫作業の効率化をはかります。

(4) 収穫・調製

小ぎくでは、花卉が着色して爪立ちとなった頃が収穫適期となりますが、出荷時期や出荷先、品種によって異なる場合もあるので、仕向け先にあわせた適正な切り前を確認し調製します。

(5) 病害虫防除

ア 白さび病

気温 15～23℃、湿度 90%以上の多湿条件で感染しやすくなります。降雨前の薬剤散布で予防に努めます。また、発病後は罹病葉が伝染源となるので圃場外に持ち出し処分するほか、治療効果の高い薬剤を散布し感染の拡大を防ぎましょう。

イ アザミウマ類

ミカンキイロアザミウマ等が媒介するキクえそ病 (TSWV による) などのウイルス病が見られるので防除を徹底します。圃場内外の雑草が各種害虫の増殖源となるので、雑草防除も必ず行ってください。

ウ オオタバコガ (写真4)

着蕾が始まっている8月咲き品種では、今後、被害が多くなると予想されます。各地域の防除ごよみや防除情報を参考に防除を徹底してください。

(6) 病害株の抜き取り

キクに発生するわい化病 (キクわい化ウイルス、写真5)、キクえそ病 (TSWV)、半身萎ちょう病に感染した株は、薬剤散布による治療ができないため、見つけ次第抜き捨てます。特に、草丈が隣の株に比べ極端に短い株はウイルスに感染している可能性がありますので、すぐに抜き取りましょう。

感染株を放置すると健全株への感染が広がるほか、感染株を親株に用いると翌年の発生が拡大する原因となります。したがって感染株は圃場内に残さないことを徹底してください。



写真4 オオタバコガによる蕾の食害



写真5 わい化ウイルスに感染した株

3 親株の選抜

次年度用の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害の感染が確認できません。このため、収穫が始まる前に次の点に留意して親株の選抜を行い、目印を付けておき、収穫後に親株とします。

- (1) 草丈が十分に伸び、草姿が優れる
- (2) 開花期が目的の時期に合う
- (3) 病虫害 (特にウイルス、ウイルス、半身萎ちょう病) に侵されていない
- (4) 株の生育・充実状態が揃っている

なお、わい化病やキクえそ病に感染した株や、発生株周辺の感染の恐れがある株は、必ず抜き捨てて圃場に残さないことが被害拡大防止の基本です。

次回の発行予定日は7月27日(木)です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しています。発行年月日を確認のうえ、最新の情報をご利用ください。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう